

スイスで鷗外の「高瀬舟」を読む

大阪府池田市立緑丘小学校

佐々木 豊

一 在外教育施設欧州巡回指導

海外子女教育振興財団の依頼を受けて、イギリス・デンマーク・ドイツ・フランス・スイス各国に在る補習授業校を巡回指導する機会を得た。

これらのたいいていの補習校では、教員免許を有さない現地採用教員（国際結婚した主婦や留学生等）が日本国内と同じ教科書を使用し、主として国語の学習をしている。

今回の巡回指導で回ったチューリッヒ補習授業校で出会った中学二年、三年の五名の子どもたちは、全員スイス永住を目ざしている。共通しているのは、この子どもたちの母親は日本人で、父親がドイツ語を母語とするスイス人である。それでも、この子どもたちは、週末になると、保護者の車に乗って、補習授

業校にやってくる。家庭ではドイツ語、日本語が入り混じっている。長い夏休みになると、母親の母国である日本に里帰りをする。そのようにして、一つの母語、日本語にかかわり続けようとしている。

私は、ここスイスチューリッヒ補習授業校で、鷗外の「高瀬舟」の師範授業を実施した。

二 森鷗外の「高瀬舟」という教材

幼い頃に両親を病で亡くした喜助は、弟と助け合い、貧しいながらも何とか二人で、その日の仕事を頼りに暮らしてきた。病弱な弟は、兄だけが働き苦勞していることに対する負い目から、自分の咽喉に剃刀をあてて自殺しようとするが死に切れない。

その日の仕事を終えて家に戻った兄喜助に、「どうせなおりそうにもない病気だから、

早く死んで、少しでも兄貴に楽をさせたい。」と、自分でかき切った咽喉から漏れる息を手で押さえ、やっとの思いでそう話した。「剃刀が刺さったままでは苦しくて仕方ないので、兄さん、剃刀を抜いてほしい。」と。

ついには弟の願いを聞いて、咽喉に刺さった剃刀を、兄喜助が引いて抜いてやる。弟は、間もなく息絶える。

この行為で、兄喜助は、弟殺しの罪状を負い、遠島を申し付けられ、今、高瀬舟に乗り込んでいる。

三 チューリッヒのブリストルホテルで

スイスで生まれ、ドイツ語を公用語とするスイスの現地校で学ぶ、中学二年・三年生将来日本に戻る事はないと見込まれているスイス人の父と、日本人の母親との間に生まれた

子どもたち)には、この難解なテーマを持つ「高瀬舟」は手に負えないだろうと思つてゐた。

補習校での授業前夜、私はチューリッヒのホテルで、授業準備に取りかかった。日本国内では、この教材は、読書教材として五時間で指導することになっている。ここは、在外教育施設。年間三〇日の授業日しかない。補習校側からは、「二時間で完結してほしい。」との要請を受けた。

一時間目は範読。二時間目は、生徒から、自分で読みたい場面を指摘させ、そこを讀みたい理由を発表させる。最後に、「高瀬舟」の、「本の帯」作りで、一言感想を書かせよう。

そのように構想を立てた。ここには、この難解な「高瀬舟」の学習が、スイスで一三〜一四年も生活してきた生徒には理解できないだろうという思いからの授業構想だった。

前夜、ホテルでの私の授業準備は、ひたすら音読、朗読の練習に割いた。明け方、ようやく読みの練習を終えて、二時間ほど眠り、チューリッヒ補習授業校に向かった。

四 オウム返しにの国語ではなく

予定通り、私は一時間目を私の「高瀬舟」範読に充て、二時間目は、五人の生徒から、「私

の音読したい箇所」の発表をさせた。その一人ひとりが実に興味深い発表をした。

○弟が、自分の命を絶つことを兄に依頼しなければならぬ状況がここにはある。
○生きながらえることが困難な弟の命を、兄が絶つことができたのは、むしろ幸いといふべきではないか。

○救うために殺すことは罪にならないと思う。等々、スイスで永住を決めている、父親がスイス人、母親が日本人という国際人中学生は、一人ひとりきちんと「高瀬舟」に向かつてゐる。

こんな難解なテーマを持った鷗外の近代小説など、週一度のアマチュアの先生が教える補習授業校の国語の授業では理解できないだろう、と思つた私の予想は見事に裏切られた。鷗外の難解な文章がスラスラ音読できるわけではない。しかし、この生徒たちは、スイスの現地校で、公用語のドイツ語という国語で、あるいは道徳で、〈安楽死〉について考える機会があったことだろうと、思い至るのであった。

◎日本語をすらすら読めないから、鷗外の「高瀬舟」の難解なテーマなど理解できないだらう。

という考え違いを、国内の国語学習においても行っているかも知れない。ドイツ語で〈安

楽死〉を考えている補習授業校の子どもたちは、鷗外の「高瀬舟」を手練り寄せることができている。

最近流行の小学校英語では、時計を示しながら、〈What time is it now?〉と問う場面があるそうである。また、四月から担任を持つてもらっている先生から〈What's your name?〉と問われるようなナンセンスを、根幹となる国語科の学習場面でもしているのかも知れないと、身震いしたのである。たとえば、『春の小川』には「さらさら」という言葉が対応する。』と、感じることも考えることもしないまま覚えさせられているような国語教室になつてはいないだろうか。〈青〉という言葉の意味は、辞書には〈澄み切った空のような色〉とあるが、〈空よりも濃い海の色が本当の青だ〉と感じ・考える子どもたちを育てる国語の時間が、今こそ大切にされなければならぬ。日本から遠く離れた在外で学ぶ邦人子弟の方が、正しく日本語(国語)を学んでいる。

欧州に出かける機会を持つことができてもなかった。

ささき ゆたか 池田市立緑丘小学校校長。「池田子ども詩の会」主宰。現在、大阪府小学校国語科教育研究会会長。